

大学の学科名に「土木」が復活

広島工業大学 工学部 環境土木工学科
教授 十河 茂幸



「土木」のイメージの低下が発端

名を残さず社会に貢献する土木技術者のはずが、事件を起こせば土木作業員とマスコミに決め付けられ、建築と土木でイメージの違いが大きく異なる事態になった。公共工事の受発注の方法が問題視され、「談合」をする「ゼネコン」とマスコミからの攻撃を受けることがイメージダウンに追い打ちをかけた。脱ダム宣言に始まり、「コンクリートから人へ」などのキャッチコピーも土木に携わる技術者には逆風となり、その果てに大学の土木工学科は定員を下回り危機的な事態に陥った。失われた20年は、大学の土木工学にも苦難の道となった。

土木志望の学生が減少した低迷時代

土木のイメージがダウンしたことから、多くの大学は学科名から「土木」を外し、環境、情報、システム、デザインなどの組み合わせに変更する学科が続出した。広島工業大学もご多聞に漏れず、都市建設工学科、都市デザイン工学科と名を変えて志望者を確保する戦略に切り替えた。しかし、名を変えた多くの大学も名は体とはいえないのが実状である。つまり、就職先である建設業からの要望に応じて、看板はかわるものの、教育内容は従来の土木工学のカリキュラムのままとした。学科名と異なるため、退学者も出る始末であり、学科名に対して説明が必要な状況が継続していた。

土木の必要性が理解される皮肉な事態

阪神淡路大震災、東日本大震災、広島で起きた土砂災害など、近年は忘れる暇もなく自然災害が頻発する。その都度、若者はボランティアなどを通じてインフラの整備が重要であることを認識する。その結果自然災害が起こるたびに土木志望の若者が増加する。しかし、あいにく土木を冠とする大学の学科が見当たらないとの声が聞こえる。「実は土木ですよ。」と言いつに近い説明をするのも後ろめたい気がする昨今であった。災害が生じた後に見直されることに、土木の重要性を社会にアピールできていないことに無力感を感じる次第である。

土木の名称復活で新入生の増加

皮肉にも災害に助けられた形といえるが、広島工業大学も「環境土木工学科」として、今年から「土木」の二文字が復活した。余計な環境の二文字が加えられているのは、いまだに「土木」だけでは社会に受け入れられないのではと懸念するトラウマの名残であるが、「土木が復活するなら」と、土木推進派は妥協した形となった。ともあれ、社会の土木志望の高校生にはわかりやすくなり、結果として定員を大幅に上回る新入生を確保することになった。「土木」に対するイメージチェンジにつながれば幸いであるが、土木技術者の全員が襟を正すことを期待して止まない。